

平成元年 1989年 創刊 No.427

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2025年 11月号



FERDINAND HODLER, Studie zu Fröhliches Weib, um 1911 © Musée Jenisch Vevey, Schenkung Rudolf Schindler
Foto: Musée Jenisch Vevey/Julien Gremaud

杉本純の原子力の話Ⅱ

ウィーンと京都 No.160

日本原子力学会には、経験豊富なシニアの責任ある活躍と、他世代、次世代への貢献を目的としたシニアネットワーク連絡会（以下、S NWという）がある。シニアと学生との対話会がS NWの代表的な活動であるが、同時にシンポジウムを毎年開催している。本年のシンポジウムは「長期的な視点に立った骨太のエネルギー基盤を確立せよ！」をテーマとして、10月16日午後国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催された。原子力関係のシニアを中心として、関東地区の若手技術者や学生、関西や新潟等からも含めて約140人の出席があった。

S NWの早野睦彦会長の開会挨拶に続いて、福井県選出の自民党所属参議院議員、滝波宏文農林水産副大臣より来賓挨拶があった。シンポジウム第一部では、日本エネルギー経済研究所の小山堅氏より「電力安定供給確保と脱炭素化の展望と課題」と題する基調講演があった。「中東情勢など地政学リスクの影響で国際エネルギー情勢が激動を続けている。エネルギー安全保障と脱炭素化の両立に向けたエネルギー転換は、世界の分断深刻化やトランプ2. 0の影響でますます容易ならざる挑戦となった。生成AIやデータセンター普及拡大で電力需要が増大し電力安定供給がエネルギー政策の喫緊課題となった。第七次エネルギー基本計画で示された通り、安全性を確保し国民理解を得た上での原子力の最大限活用は「S + 3 E」同時達成のカギを握る」との説明があった。

第二部「中長期のエネルギー政策は如何にあるべきか？」と題するパネル討論では、モデレーターである田中治邦S NW運営委員より、三名のパネリストが紹介された。最初のパネリストである慶應義塾大学教授の野村浩二氏より「空洞化を招く脱炭素政策と日本の産業再生の課題」と題し「主要工業国におけるエネルギー内外価格差と産業空洞化の最新動向を紹介しながら、日本経済における安価で安定的なエネルギー供給の構築と、脱炭素政策からの戦略的転換の必要性を論じる」との課題提起があった。

二人目のパネリストである東京大学特任教授の荻本和彦氏より「需給動向と3 Eからみたエネルギー部門脱炭素化の課題と展望」と題し「環境・エネルギー分野での取り組みは、3 Eと安全性の確保を目標に、省エネ・電化、再エネ、原子力、分散型資源、さらには電源や需要の再配置とそれを結ぶ送電線の役割が重要である。これらのエネルギー部門脱炭素化における原子力の役割を考える」との課題提起があった。

三人目のパネリストである第七六回日米学生会議環境経済とエネルギー安全保障分科会代表で東大医学部三年生の富澤新太郎氏より「若者視点でのエネルギー将来ビジョンの提案」と題し「近年、脱炭素潮流にある中で、かつて以上に電力を大量消費する産業の勃興が期待される。安価かつ安定的な電力供給の確保を目指す上で、分散電源化の進展や新規電源投資の在り方を、統合コストや市場の動向を踏まえて考察する」との課題提起があった。

この後、田中モデレーターの司会により、周辺情勢、脱炭素と原子力、原子力の経済性、将来の原子力発電依存度の目標、原子力増強への具体策、の五つの論点について、パネリスト間で活発な意見交換が行われ、充実したパネル討論となった。従来のシンポジウムは原子力に関する技術論が中心であったが、今回は原子力以外分野や文科系のパネリスト、それに大学三年生のフレッシュなパネリストも登壇し、幅広く多様な観点からの議論が活発に交わされて、実り多かつたとの感想が参加者からあった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の十一月のイベントを紹介したい。秋が深まり冬の気配を帯びるこの季節、ウィーンではクリスマスマーケットが始まり、京都では紅葉の彩りが最高潮を迎える。どちらの都市も、季節の移ろいを祝うように光と人の集う場が生まれる。

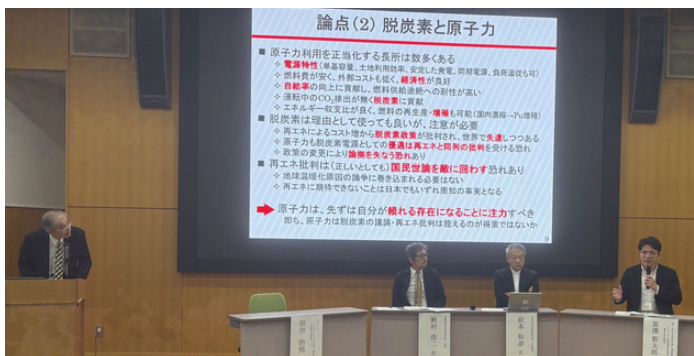
ウィーンでは十一月中旬、市庁舎前広場を中心にクリスマスマーケットが開幕する。歴史ある市庁舎を背景に木造屋台の明かりが並び、焼き菓子やホットワインの香りが冬の訪れを告げる。十九世紀の市民市場に起源をもつこの催しは今では市民と観光客合わせて数百万人を集める大行事である。またシェーンブルン宮殿前でも優雅なマーケットが開かれ、宮廷文化の香りを今に伝えている。さらにベルヴェデーレ宮殿や旧市街の広場などにも小規模な市場が設けられ、街全体が光に包まれる。音楽と美術の都らしく、装飾や演出にも芸術性が高く、訪れる人々は寒気の中に温かいぬくもりを見出す。こうしてウィーンは、冬を迎える祭りの都として静かに輝きを増していくのである。

一方、京都では十一月、紅葉が街を鮮やかに染め上げる。清水寺、永観堂、南禅寺などでは夜間ライトアップや特別拝観が行われ、光に照らされた紅葉が伽藍や庭園を幻想的に浮かび上がらせる。各地で開かれるもみじ祭や紅葉祭では、詩歌や茶会、庭園公開が行われ、秋の自然と古都の文化が響き合う。また、嵐山もみじ祭では渡月橋のほとりで雅楽や舞が奉納され、山と川と紅葉が一体となった風景が広がる。これらの行事は観光行事にとどまらず、古来の自然観や無常を美とする感性を今に伝えるものである。紅葉の名所をめぐる人々には、自然のうつろいを愛でながら儚さに祈りを重ねる情緒が漂う。散りゆく葉を惜しみつつ、京都の人々は季節の終わりに心を澄ませて秋を見送る。

ウィーンが灯りと市場で冬の始まりを祝うように、京都は光と紅葉で秋の終わりを見送る。ともに人々が自然と歴史に寄り添い、季節の節目を共有する場を育ててきた。十一月、二つの都は異なる文化の形で同じ「ぬくもりの季節」を迎えるのである。

余談であるが、筆者は本シンポジウムには企画委員として参加し、パネリストの一人に富澤氏を推薦し、三月末に同氏と会って登壇を依頼した。当日は受付を担当した。ウィーン駐在時にはクリスマスマーケットで暖かいホットワインを飲んだり、人形や知恵の輪を買ったりした。京都では永観堂、南禅寺など各所で紅葉を楽しんだ。今月も両市の十一月のイベントを紹介することができた幸運に感謝しつつ、クリスマスマーケットの写真を掲載させていただく。

杉本純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長）



S NWシンポジウム：パネル討論の様子

